大学はいま 研究室から

岐阜大学教育学部家政教育講座　大藪　千穂教授

「男女共同参画」進んでる？

「女性が輝く社会」。最近よく聞くが、学生や企業の意識はどうであろうか。昨年、「岐阜の大学生と企業にお

ける男女共同参画に対する意識調査」を岐阜大学・岐阜女子大学生1473人と十六総合研究所の「企業動向調査」で237社を対象に実施した（共同研究者：柴田奈緒美＝岐阜大学、三輪聖子＝岐阜女子大学、早川博美・奥田真之＝十六総合研究所）。

調査の結果、女子は特に子育て関連に関心が高い。職業観は、母親が働いている場合、常勤を選択する傾向が高くなり、出産後も職業を続けたい割合が高いことから、母親の働き方がその後の生き方に影響を与えるようだ。

育児・介護休業については男女とも9割は取得したいと思っている。しかし企業の調査では、育児休業を3割しか取得しておらず、現実とのギャップが垣間見られた。

家事は母親の職業の有無に関わらず主に母親が担っていた。介護は、女子は子ども、男子は配偶者が主に担うべきと考えている。

さらに女性が職業を持つ上での問題点は、学生は社会の理解不足を挙げたが、企業は時間外労働や深夜労働をさせにくいことを挙げた。このように学生では男女間で、そして企業とも意識・認識に差が見られた。

今後、学生には新しい価値観への関心と男女が協力して役割分担する必要性と生活設計の教育をしていく必要がある。一方、企業に対しては、従業員が法律で定められている制度を活用しやすい環境づくりを求めていく必要があろう。